

経営学は全体の構造を掴みにくい分野である。多様な知識の複合領域であるから。経営学者だけではなく、社会人経験のある方なら誰でも、経営全般とはいわなくても組織やマネジメントに対して一言あるであろう。また、経営は科学では割り切れないものだという意見もあるであろう。実際、国内の著名な経営学者で経営はサイエンスではなくアートであると述べている人もいる。しかし、経営を実践することはアートかもしれないが、分析することはサイエンスであるというこはいえよう。ただし分析して理解しても経営ができるとは限らないが――。

## 経営学の 学術論文の研究分野

図1は経営学の学術研究論文の引用ネットワークの分析の俯瞰図である。約6万本の学術論文が発表されている巨大な学術研究分野である。ほとんどの論文が上位3つのクラスターに属する。3番目までのクラスターに含まれる論文数が1万を超える一方、4番目のクラスターに属する論文数は1千程度である。上位3つのクラスターはそれぞれ、技術論、戦略論、組織論を扱っている。図1にはそれ

# 現代社会を俯瞰する

vol. 6

松島 克守

Katsumoti Matsushima

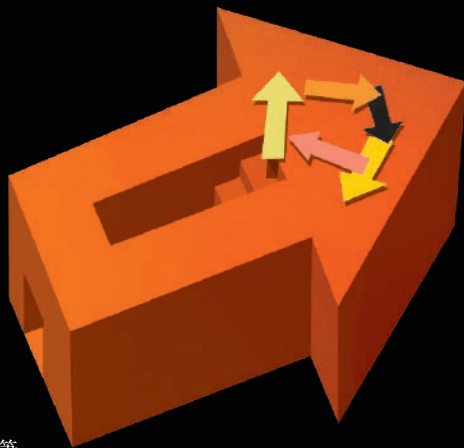


Illustration: ネモト円筆



### PROFILE

まつしま かつもり  
俯瞰工学研究所 <http://www.fukan.jp/>  
所長(東京大学 名誉教授)  
東京大学工学部卒業、IHI航空機エンジンの生産技術者を経て、東京大学で生産システムの知能化、アレキサンダー・フンボルト財団奨学研究員としてベルリン工大でCAD/CAMの研究に従事。その後日本IBMでパソコン、製造業のマーケティング戦略の責任者、プライスウォーターハウス日本法人常務取締役を経て、99年より東京大学工学系研究科教授。経営戦略学専攻で「俯瞰経営学」を講義。総合研究機構・機構長、イノベーション政策センター長等を歴任、09年3月退官。現在も地域活性化プロジェクトの支援、プラチナ構想ネットワークなどを推進するとともに、上場企業の社外役員など経済活動にも参画。(NPO) ビジネスモデル学会会長、(NPO) ITコーディネータ協会理事などを務め、主な著書に『知の構造化の技法と応用』、『地域新生のデザイン』、『MOTの経営学』などがある。

ら主要なクラスターのみをネットワーク図上で位置を示した図と、各クラスターを構成するサブクラスターの情報も同様に示してある。

経営学は俯瞰してみると、上記の様に大まかに3つの領域に分かれるが、明確には分かれぬ。すなわち、それぞれの領域の重なりが非常に大きいことが分かる。個別のクラスターの位置を表示した挿入図を見ても、たとえば技術論というクラスターに属する論文がネットワーク全体を覆っているということが分かる。これは一つには、戦略論や組織論を議論するときには技術の視点が不可欠であり、この領域の論文を引用しているからである。また、技術論自体が未成熟であり、アンカーとなる領域やハブ論文を有しておらず、内部

に明確な構造が形成されていないために、局所的に密な構造を持たないためである。したがって、マーケティングなどの経営技術の研究分野も含まれている。クラスターリングを行うといくつかの領域を抽出することはできるが、この段階では、技術論のクラスターは独立した研究領域というよりは、お互いに緩やかに連結した論文集合であると捉えるべきである。

技術論に比べると、戦略論や組織論の方が可視化の絵から判断する限り、まとまりがあるように見える。戦略論の中にはサブクラスターとして競争資源、意思決定、制度設計というサブクラスターがあり、競争資源、競争力の源泉となる組織の資源の獲得方法、優位性と企業のパフォーマンス